

⁶。このように、羅州の地主比率が全羅道の平均より低いのに対し、小作地の比率は全羅道の平均を上回っていることから、羅州に大地主が多く存在したことがわかる。日帝時代の羅州の大地主は古くから郷村に居住する一部の士族勢力や主に羅州邑内にいた郷吏出身勢力、そして日本人地主であった。

ところが、1930年代初めからほぼ同時に施行された榮山江改修工事と多時水利組合事業によってこの地域の農業環境は激変した。多時面の水利組合地区では土地改良と農事改良事業は問題なく統合できたが、収穫量に比べ過重な水利組合費が賦課された。その結果、1930～1945年間に10町歩以上の地主層が所有する農地面積が3%ほど増加する傾向を示したが、朝鮮人地主の所有面積はむしろ83.2町歩から27.7町歩へと急減した。それほどではなかったとはいえ、日本人地主層も同じ傾向を示した。その一方、日本人の株式会社を中心に土地の集積が進み、植民地地主制が30年代にも依然として強固に維持された。このような現象は地方有力者の財産規模が縮小したことを意味するもので、実際に地方有力者の影響力も減っていった。

2 韓末の羅州郷吏層

(1) 民乱と東学農民戦争

1862年に三南地方を巻き込んだ民乱は、その後の一時収束するものの、開港以後、再燃した。1860年代には「民乱が起こらない村はない」というほど頻発した。とりわけ羅州では1880年代に入り、「羅擾十年」ともいわれるほど民乱が頻繁に起こり、1889年からは3年連続で民乱が発生した。⁷

1889年に起こった民乱の端緒となったのは、当時の営将の鄭東顯であった。彼の虐政に耐え切れず、民人が立ち上がったのである。この時に民乱に加担した村は38カ面に及んだ。事実上、羅州全体で起こった大規模な民乱であった。⁸しかし、1889年の民乱の後にも、官吏の腐敗や無能のせいで民乱は3年間絶えることがなかった。1891年には大規模な民乱が長期にわたって続き、民乱に加担した人々も1000人に達した。そのような中、1891年7月、暗行御史の李冕相が事態を聞いて駆けつけ、3回にわたって直接宣諭してようやく解散させるに至る。だが、わずか数日後に民人は再び立ち上がった。乱民は槍で武装し官庁へ打ち入って牧使を脅して吏郷を選任し、各種の帳簿を調べて節目も定めた。これを受けて、暗行御史の李冕相は10月11日に再び羅州に行き、直接に民乱を鎮圧し、ようやく乱民を解散させることができた。

長期間の民乱によって羅州は以前よりも疲弊した。これに対して李冕相は「邑不邑民不民」になってしまったと嘆いた。長期にわたって頻発した民乱、とりわけ1891年の民乱は羅州地域における郷吏層を政治的に苦しい立場に追い込んだ。民乱の結果、羅州の吏校

⁶ 『全南事情志』。

⁷ 「湖南肅啓草」『各司謄録』54、99頁、113頁。

⁸ 「湖南肅啓草」『各司謄録』54、109頁、122～123頁。